『遊仙窟』の成立に関する一考察

『長田夏樹論述集（上)』第 7 章
（原載 :『神戸外大論叢』第 5 巻第 2 号，1954 年 12 月）

この論文は、中国では早く佚書となり、日本にのみ伝わった唐・張文成の小説『遊仙窟』についての文献学的な研究である。同書は奈良時代には日本に渡来し、古代日本文学に大きな影響を与えた作品として知られるが、著者が考察したのはその中国における成立過程と中国文学史における位置付けである。なお、本論文の最終節「そのプロット」はこれに先立って執筆された「遊仙窟雑験」(『中国語学研究会会報』第 20 号，1954）をそのまま取り込んだものである。

『遊仙窟』のテキストには無注本と有注本という二つの系統があるが、本論文の考察対象は有注本であり、特にその注の成立過程が詳しく論じられている。著者は第 5 節「注の形式と作者」において「夫蒙云」「陳云」「陳三云」といった注の形式に着目し、「夫蒙云」が最初と後半部分に偏って分布していることから、前半で記名のない注の作者は夫蒙であり、初め陳・陳三らと輪読が行われたが、陳等は途中でやめ、主として夫蒙が注したので一々夫蒙と記さなかったが、後半から陳・陳三の二人が加わり、しかも陳を主として輪読が行われるようになったため、「夫蒙云」と明記されるに至ったと推定している。また、その「夫蒙」をめぐって、吉田幸一氏は神田喜一郎氏の推定を受け継ぐ形で「夫」姓を新羅人のものとしたが、著者は「夫蒙」が複姓であるとしてこの説を退け、夫蒙氏が涼州・甘州等の地で活躍したタングート（党項）系の一部族であることを考証した上で、注が 9 世紀後半に隴西の地で書かれたものと推定している。こうした注の成立にまつわる著者の考証は、編集史的な観点を導入したもので極めて妥当性が高く、その文献学者としての力量が遺憾なく発揮された部分と言える。

また、『遊仙窟』の文学史的位置付けについて、著者は魯迅『中国小説史略』(1923）等により「唐代伝奇」と分類されてきたこの小説が、実際には伝奇盛行の時代に先立って書かれており、駢文や対話と多くの詩形を交互に配置する形式を持つことから、むしろ「変文」等俗文学の先駆けとなる存在であると主張している。この説は現在では広く受け入れられており、これも本論文がなした重要な学史的貢献と言える。　（竹越孝）